

東リ演

加盟のための資料

はじめに

結成のよびかけ

結成までの経過

結成のことば

東リ演規約

第1年度運動方針

加盟劇団連名

東日本リアリズム演劇会議

東り演に結集しましょう

一九六二年の夏、西日本リアリズム演劇会議（西り演）が創立され、つづいて翌六三年の夏にはその援助をうけて、東日本リアリズム演劇会議（東り演）が結成されました。

この二つの兄弟組織が生まれたことは、革命的、進歩的な歴史と伝統をもつ日本の演劇運動にとつて、大きい意義をもつています。

いままでのところ、東西り演について、中央―東京に対する地方劇団の、あるいは専門劇団に対する働く人たちの劇団の結集体という評価と位置づけが、一般にされていますがそれではこの組織の充分な理解になりません。

たしかに発足当時の東り演には、東京の劇団は二つ、専門劇団は一つしかありませんでしたが、現在では東京に五劇団、また専門劇団も西り演をふくめると八劇団が加盟していますから、右の規定では性格が曖昧になつてしまふわけです。

東西り演のつくられた目的は、東京であれ、地方であれ、また専門であれ非専門であれ、じぶんたちの観客にたいし責任と一定の影響をもつ演劇集団が、交流によつてお互いの活動から学び、協力によつて現実変革の武器であるリアリズム演劇の創造と普及を發展させることにあります。

ですから、この組織は単なる連絡機関や協議会とちがつて、運動の基礎になる現実認識から創造方法にいたるすべての路線で、お互いの自主性と独自性を尊重しつつ、しかも全体として高い統一性を追求していく協同体なのです。

☆ ☆

一九六〇年、日米安保条約と三池炭鉾争議をめぐる二つの大斗争の経験は、私たちの演劇内容と運動のすすめかたに、ふかい影響を与えました。

平和と独立、民主主義と生活向上をめざす国民的な要求は、三池を中心とする全労働者階級の反帝、反独占のたたかいと結合する可能性をしめしながら、敵の最大級の攻撃と味

方内部の統一のよわさから、決定的な勝利をおさめることはできませんでしたが、この斗いは、労働者階級の指導により、敵を明らかにし統一してたたかうことの大切さを実践的に教えてくれたものであり、そこには四七年の二・一ゼネストからの大きい前進がみられます。

一九四五年、専門演劇人たちは日本の敗戦にさいして、戦前の演劇運動—とくにプロレタリア演劇運動の歴史的総括を、個人または所属劇団の体験にねざした評価におきかえて主に否定的におこない、そこから活動の再開も分散の傾向をとりました。

労働者—勤労階級の演劇活動は、四五年から四八年にかけて専門演劇の協力をうけつつ全国的に活発におこなわれましたが、ここでも外から上からの指導という、旧プロット

(日本プロレタリア演劇同盟)の運動図式の適用が中心で、真に労働者の自主的な、また階級的な創造運動には、一部を除いてなりえなかつたといえます。そして、自主自立の上で専門演劇とののぞましい交流関係をつくりだすまでの成長をみずに、中国—朝鮮へのアメリカ帝国主義の侵略戦争にともなう日本の進歩勢力へのはげしい弾圧は、労働者の演劇運動に壊滅的な打撃をあたえると同時に、両者の紐帯をも断ちきつてしまいました。

こうして五〇年前後からの一〇年間、労働者—勤労階級の演劇活動にみられる特徴は、職場では比較的趣味的なサークルの民話劇、抽象劇などの上演による復活がおこなわれ、一方職場をおわれたメンバーを中心に、地域に劇団がつくられていつたことです。その中で専門化を実現した劇団もふくめ、一定の歴史をもつ地域劇団の誕生が、ほぼこの時期に集中しているのはそのためです。

全面講和を要求するたたかいから、憲法擁護、核兵器禁止、基地撤去、教育反動化反対生活と権利を守るたたかいをすすめて、安保条約改訂期の六〇年をむかえて、専門演劇人たちは新劇人会議を組織し、安保放棄という政治行動に大きく統一して結集しました。

この新劇人会議の結成に学んで、政治から文化までの安保支配体制を打破し、労働者階級とともに日常的、系統的にたたかう中で、創造運動の理念と方法をうちたてることをめざし、全国的な規模での東西リ演が創設されたのは前述のとおりです。

☆ ☆

東西リ演の結成によつてもつとも勇気づけられ、具体的にたすけられたのは、日本の各地で活動している地域の労働者、勤労者の劇団であつたことは、その加盟が四〇余にのぼる現状で判断できます。

東リ演のできる以前、私たちの劇団はそれぞれの地域で、じぶんたちを支持してくれる観客を唯一のたのみに、必死に創造―普及の活動をすすめてきました。そのなかでは、成果を評価し誤謬を正すことも容易でなく、活動が壁にぶつかるとその壁の厚さも、どうのりこえるかの判断もつきにくく、不安な孤立感にやみましました。

東リ演ができて、まず私達が励まされたのは、こんな多くのなかまが日本中で、同じ目的をもち、苦しいがやり甲斐のあるしごとのためにがんばっている―という実感でした。こうして孤立感がうすれるのと入れちがいに、なかまの活動からの具体的な教訓が洪水のようにおしよせてきました。未知の、したがつてじぶんたちの活動にすぐとりいれたい教訓もあれば、なかまの実践によつて二重三重にたしかめられ、いまは確信になつたじぶんたちの体験もありました。

また、じぶんたちの創作した戯曲がなかまの手によつて、未知の観客に提供され、じぶんたちの活動上の発明工夫が、なかまのしごとの発展に役立つことにもなりました。

東リ演の総会をはじめ、毎夏ひらかれる演劇ゼミナール、あたらしい書き手のための創作学校と創作向上のための創作会議、経営会議や東リ演担当者会議、また今後力をいれるオルグ団の派遣などのほかに、北海道、東北、関東、東海、中部五つのブロックがブロック単位の観劇交流、ゼミナールなどを通して連帯―学びあいの綱の目をひろげ、専門劇団グループに属する三劇団からは、専門家としてまた全国的な視野にたつての協力が、急速

につよめられています。

同時に、この連帯関係は東西リ演の間でも六八年には一段とすすみ、とりわけ私たちの運動機関誌としての「演劇会議」(季刊)が両組織の合同編集で発行を開始したことは、運動理論をたかめ実践をたすける上で、非常に有効な武器といえるでしょう。

☆ ☆

このように東リ演への結集によつて、私たちの運動はたしかな発展をとげました。ここから生みだされた戯曲は数多く上演され、舞台は観客の高い要求をみたすようになり、活動の方法についても立派な創意性が発揮されています。それによつて、私たちの方針の正しさが証明されています。

しかし、一九七〇年を目前にして私たちが果たさなければならぬしごと―観客に真実をつたえ、勇気づけ、行動させる米のめしのような芝居をつくること。その生産工場としての強靱な劇団・サークルを、職場に地域につくるしごと。専門劇団、労演の仲間と力をあわせ、本当に民族的な民主的な演劇を開花させるしごと。多くの文化集団と手をくんで、地域の文化状況を強化していくしごとにむきあつた場合、有効な活動を保証する理論の上でも、互いに学びとる経験の上でも、まだまだ私たちの力量は充分とはいえません。そこで、東リ演への加盟劇団を増やし、それによつて東リ演と劇団双方の統一的な発展を実現することが、いまきわめて大切なことになりました。

私たちの力量とは、団結し集中した力量です。古い歴史のある劇団にはそれのみある能力があり、新しい若い劇団にはイキイキしたエネルギーがあります。しかし学びあひは、古い劇団から新しい劇団への供給という形でおこなわれるばかりではなく、古い劇団の活動から歴史の古い劇団が援助されることが、最近とみに増えています。一定の力量がなければ―と、東リ演への加盟をためらう例が多いのですが、そうではなく、団結と集中のな

●東り演会費●

団体加盟

劇団員二十五名以上 月額一、〇〇〇円

劇団員二十五名未満 月額 六〇〇円

(三ヶ月分前納のこと)

個人加盟 年額

六〇〇円

(六八年八月改正)

かてその力量を生みだそうではありませんか。
東日本の各地点で活動する全劇団は東り演へ結集し、その大きな力で、やり甲斐のある私たちの課題にたちむかひましょう。

季刊

演劇会議

創造、普及の具体的な交流
論文・レポート・戯曲・劇評

東西り演合同機関誌
A5・一五〇▽三五

演劇会議刊行所

川崎市上平間1275

044(52)8815



結成のよびかけ

(1963年7月)

今年四月はじめ、静岡市に集つた私たち、名古屋演劇集団、岐阜はぐるま、静岡芸術劇場、京浜協同劇団の四劇団は、八西日本リアリズム演劇会議Vからの代表をふくめての話しあいの結果、八東日本リアリズム演劇会議V結成について、原則的な考え方の一致をみたので、準備会を発足させると共に東日本の演劇の仲間がこのよびかけをおこなうことを決めました。

私たち四劇団は、歴史も条件もそれぞれ異りながら観客との緊密なむすびつきを何よりも大切にし、その高度の要求を鏡に自分たちの創造と普及のしごとを展開しようとする共通点から相互に交流し学びあう兄弟

の関係を今日までにつくりあげてきました。それは単に儀礼的な交際や一時的な連帯行動に止まらず、劇団活動全体の長所を共同のよろこびとし欠陥を自己の痛みとする。そういう質のものに成長したのであります。

私たちはいま日本の演劇状況を展望する中で、正しい世界観にねざし、観客との固い結合を土台に、新しい演劇を生みひろめる努力が、職業非職業、職場地域等の枠をこえた折山の演劇集団によつてなされてあるのを知ります。自分の観客に責任をもつこれらの活動がどんなに私たちをつよく支え、励ましてくれるか、はかり知れません。

私たちはあなた方未知の仲間ともしつかり手を結びたいと希います。日本の新しい演劇を、その伝統と観客に学びつつ創りだし、ひろくかえして行く運動がそれ自体求めるのは私たちの団結です。日本の演劇状況があるがままに認め、その枠内での自由に息づくやり方から、私たちが自主的に演劇状況をつくりだすやり方に転換するために、最高の道徳——私たちの団結を現実即して熱望します。八東日本リアリズム演劇会議Vのよびかけは完成した既成組織への参加欲誘ではなく、あなた方はどう考えておられるか、の問いかけであります。この組織は当然私たちの必要に即してつくられねばなりません。

演劇がさまざまな意味で現実を反映するものであり、また現実支配されるものである以上、私たちは日本の現実をつくりだしている政治に否応なく直面させられてきました。半世紀にわたる日本新劇史の側面が、その政治との関連史であるのも、演劇創造の根が新しい日本を生み出す国民的なエネルギーとその基礎を同じくしていたからであり、私たちの演劇がその頭に「新しいV」と冠せ称されたのも、そこに深い意味がある訳です。

いま日本を権力で支配している日本とアメリカの支配層が、どういうプログラムをもちどうそれを進めているかについてこまかく検討するのは、このよびかけの主目的ではありません。

唯かれらが、日本の労働者階級を搾取と弾圧と分裂で骨ぬきにし、ひろい国民層と切離し、安保体制を軸に反共核戦争の方向に一歩一歩もつて行こうとしており、そのためどんな方法でも、新しい日本の理念と行動を粉碎し、古い日本の永久的な維持に力を注いでいる点を現実にしてつかむところから、演劇と政治について私たちが共通の言葉と行動がもてるのではないでしようか。

「私たちの側で、芸術と現実、演劇と政治の関連や断絶について語っているうちに」、いわゆるケネディライシャワーコースが・思想・学術・教育・文化の領域でど

うすすめられているかについては、村山知義氏の「アメリカの対日文化攻勢と日本の新劇V」(テアトロ二三六号)に詳述されていますが、そこにみるものは「かれらの側面」の思想文化のとりえ方の強力な政治性です。」一方では巨大なマスコミの支配を通して国民全体に対する植民地的な根のない文化頹廢的な消費ムード、政治的無関心をまきちらし、一方では学者文化人を資金や留学の餌でつって、政治と文化芸術を切りはなす芸術のための芸術―反共超階級的な思想や、人間疎外、挫折感といった敗北の思想、敵の所在を不明確にし、敵より味方をはげしく攻撃する分裂―エゴイズムの思想を浸透させています。

演劇状況の中でも、日生劇場、ぶどうの会や文学座の分裂、NADA結成等に引続いてあらわれた、ごく最近の全国労演労音に対する不当な課税や調査のうごきは、そのまゝ、私たちの創造母体である演劇集団に向けられた攻撃の火ふたであり、日本の新しい演劇の息の根をとめ、かれらの支配に屈服させる政策の明瞭なあらわれとして、まさに政治的に捉え対処する必要があると思えます。

私たちは、これらの特徴的な事件の一つ一つを切りはなして局部的にみるのではなく、自己の演劇活動、職場地域の文化活動、更に国民生活全域での経験を土台にかれ

らの政策を判断すべきではないでしようか。そして、こ
うみてくると、私たちが演劇生活の日常の中でかかえて
いる、一見集団内部の問題の殆んどもその根をふかく洗
いだしていくと、必ずこの根本的なかれらの思想―政策
にぶつかるのに気づくのです。たとえば、NADAに関
して、アマチュア演劇の官僚統制という疑惑に対して創
設にあつた善意の人々は思いすごしだと一蹴していま
すが、地方では助成金がほしければNADAに加盟せよ
と称している教育委員会もでており、この善意の人々の
中にはかつて戦争中、やはり思いすごしだと説きながら
産業報国会の演劇運動なるものをおしすすめていた人の
いることは記憶しておいていいことです。全国的な
反対―疑惑を無視して新安保条約を成立させ、いままた
日韓会談やアメリカ原子力潜水艦の寄港やF―105D機
の配置を、没義道に暴力的に押し通そうとしているかれ
らが、文化―演劇のジャンルでは、最低思いすごしを裏
切るほど神土的であり没義道を暴力的な行為はほしだい
らう、と私たちは期待すべきでしようか。

一九六〇年、安保破棄の斗いに新劇人が結集したこと
は、日本の演劇史に誇り高い一頁を加えました。政治の
危機にあつたつての統一行動は国民をはげますと共に、新

劇本来の運動の側面を蘇らすものとして、国民の胸に新
劇人会議の存在を焼きつけました。

そしてまた私たちも、あの時期をピークとするさまざ
まな経験を通して、自分たちの演劇について徹底的に考
えさせられることになりました。自分たちのしごとが誰
の何のために必要なのか、その課題を果たすために何が
必要なのか。という一見素朴な問題を一つ一つの仕事で
ときほぐし裏付けてくる中で、私たちは改めてそれぞれ
の観客と新鮮に触れあつたものです。それは、劇団から
与えられるのを待つのではなく、劇団に与えるもので
充実した観客であり、しかもその要求は回を追うごと
に質も高く量も多くなつてきました。私たちは演劇リア
リズムというものを、ここから学びはじめたのです。私
たちが業余でやつているほどに頓着なく、高い思想性、
魅力のある舞台が望まれる、その中で、四つの劇団は互
いに求めあうように集まつたといえます。

私たちは、新しい日本をつくつていく国民の中で、そ
の人々に観てもらふための演劇をつくつていけるのです。
主体的にはまだ弱いとしても、実はそれぞれの地域で責
任のあるしごとが課せられています。地域それぞれの特
殊性があり、各演劇集団の特色はあるとしても、観客に
責任を負う立場での全国的な共通した命題はたてられる

し、又たてなければならぬと思ひます。専門劇団に学ぶという一事についてもいま、全国各地にすすめられている演劇集団と地域の文化・労働・民主組織の提携による創作上演運動についても、地域劇団と労演の結びつきについても、こういう視点でとらえられ全国にかえされる必要があります。

芸術のしごとに統一戦線など、第一できもしないし、無用だという意見があります。この意見のである根拠は、組織や運動の側面は統一できたとしても、芸術団体として肝心かなめの創造上の側面で統一などできつこないということが一つ、劇団や演劇人同志の理論的な、又はそれより多くの感情的な対立がちよつとやそつとでほぐれそうもなく絡みあつた現状に、サジを投げたところに一つ、もう一つは狼が喰うのは仔羊で、自分は喰われつこないとおもひこんでいる仔豚みたいな錯覚にあるのではないでしようか。

勿論、舞台芸術の創造上の問題が、組織的に左右されたり、多数決で正否をきめられたりする筈もありませんが、私たちの考えでは現在創造上の鏡は観客だなどいつても多くの舞台が、批評活動の面ではいわゆる批評家の方を向いているようですし、またその批評にしてもおそろしく規程があいまいな上に総体乏しく、同時に劇団同

志互いに影響しあひ学びあひあり氣風が全然欠けていると思ふのです。地域職場演劇集団との交流などといつても実は何を求め合つての交流かはつきりせず、専門劇団では素人さんはどうも被害者意識がつよすぎるなどいい、素人さんの方では奴さんたち切符を売りたいから来たんだなど言い合つていたので仕方がないのです。統一戦線の問題について、それが私たちの観客と演劇のために緊急必要だという前提より、それが困難だという副次的な条件の方を優先して考えることをやめたいと思ひます。

私たちは政治の危機における統一行動の貴重な経験を基礎に国民の信頼にこたえうる日本演劇の創造と普及のペースベクトルをくつきり把握したいのです。そのためには私たちの活動を排他的に散発的に、しかも後手後手にでなく、それぞれの地点に根をはりつつ、全国的な展望をもつて互いに刺激しあひ、学びあひながらすすめる必要性をつよく自覚するのです。

このような中で、昨年夏、関西芸術座、山口はぐるま座の提唱で八西日本リズム演劇發議Vが、近畿、中国、四国、九州地方の十七劇団によつて結成され、文化の敵を明確にして斗う、民族と近代の相互関係を正しく捉える、リアリズムの基調を現実変革の思想におく、大衆と結合し普及による向上をめざす、創造發展のために

全国的視野と地域定着の姿勢を統一していくの五点を全体の統一と運動の目標としてうちだしたことは、つよく私たちを刺激すると共に、同会議が志向する全国的結集をめざしての私たちのプログラムを組む必要を痛感させました。

私たち四劇団は八東日本リアリズム演劇会議V結成について積極的に一致すると同時に、これが各地域でめいめいの観客に責任をもつて運動をすすめている演劇集団全体に潜在する要求でもあると判断しました。これは、東北・関東・東海のいくつかの集団と話しあう中で、ますますはつきりしてきたことです。私たちはこの仲間たちの意見に基いて会議の結成は既定方針に賛成するといふ受身の姿勢によるのではなく、それに合致する会議を生みだすために集団めいめいの考え方を要求をその場に正しく反映すべきであり、その場合次の内容についての私たちの意志統一が会議結成の軸になると考えたのです。

(一) 平和と独立、民主主義の確立をめざす日本国民の斗いと、私たちの演劇創造および普及の運動をかたく結合していく上での、実践的な統一。

(二) 創造上の流派や手法としてでなく、歴史と国民から付託された私たちの斗い、芸術思想としてのリアリズム演劇の認識と追求についての統一。

(三) 舞台と運動の成果欠陥、芸術の様式と方法等についての、同志的な批判と反批判、交流と援助をさかんにしてゆくための統一。

私たちはこれらの問題点をフランクにしかもねばり強くきわめ合つて、部分の差異に目をうばわれず、弾力のある強い統一体をつくりたいのです。各集団のもつ歴史構成、特色、芸術様式等の諸条件を尊重しつつ、会議の機能を高めて全国的な創造と運動の展望をひろげ、相互交流を通じて兄弟的な批判と援助の気風をつくりだすなら、観客の高ききびしい要求にこたえることができるに違いありません。それは又八西日本リアリズム演劇会議Vに呼応する東日本の演劇集団の結集という意味で、わが国の演劇状況にひとつの新しい大道をひらくことにもなるでしょう。

このよびかけがあなた方の集団ではなほあいによつて、さらに豊富な内容に発展し、あなた方の参加で八東日本リアリズム演劇会議Vの一層の充実がもちとれるよう、期待します。

名古屋演劇集団
岐阜はぐるま
静岡芸術劇場
京浜協同劇団

結成までの経過



四月三日、静岡での前記四劇団の話合いで東リ演結成準備会ができ、京浜協同劇団が事務局担当に決まったがこの中で確認したのは次の諸点でした。

イ、静芸と京浜、名古屋と岐阜には既に長期の緊急な交流があり、東リ演はその経験から出発している。

ロ、創造と普及に関する基本姿勢に四劇団は確信をもつ。

その上で反動支配の思想文化の攻撃をくじる。新しい演劇—文化状況を国民と共につくりだすために、四劇団の結束を質も量も倍化三倍化したい。

ハ、西リ演の結成—その成果が具体的なはげましになる、この準備会にも西リ演代表として、関西芸術座、山口ばぐるま座が参加した。

ニ、西リ演結成後東京の専門劇団からこれに呼応する動きは出ていない。安保斗争の中で生まれた新劇人会議も、日本の演劇状況を攻勢に転じさせる理論—実践の母胎たり得ていない。非専門の四劇団が提唱者となるのは、西リ演に比して不利な条件だがやむを得ない。専門家と業余集団、中央と地方の交流の重要性をおさえ、正しい相互協力の関係をつくっていく。

ホ、既製組織への参加ではなく、東リ演を一諸につくっていくメンバーを求める。そのための「よびかけ」をつくること。

「よびかけ」は、七月はじめ約四十の集団に配布しましたが、その中で問題として次のことがありました。

イ、地方の演劇集団の状況が、いくつかを除いて全くわからず、レポートリイ等を参考に選定するほかなかつた。このため重要なミスも考えられる。

ロ、東京の諸劇団については、基本的な方針がはつきりしているのに、配布にあたって日和見をおこしたり、独善的な判断をしたりしたため、劇団内の個人に配布する程度に止まった。

「よびかけ」を中心にして、東リ演の構想への反応は次のように示されました。

イ、演劇をやること自体今日では斗いを意味する。戦線統一の基礎をそこにおくなら「よびかけ」の内容は狭少劣鋭にすぎる。もつと巾広いゆるい組織が必要だ。

ロ、内容には異議ないが、集団として内容を具体化する能力、条件がない。又集団の当面必要とするものが、東リ演のそれとタブらない。個人参加したい。

ハ、組織への不信がある。自分の集団を大切にしたいし外からおつかふせたり、引きまわされるのはごめんだ。

七月二十七日、静岡で四劇団による第二回の準備会議がひらかれ、右の問題点をふくめて話しあい、同時に結成総会の細目を決めました。

イ、民族的民主的な演劇—文化を破カイする敵への、攻撃の武器として演劇リアリズムは創造的に主体的にとらえられねばならない。国民を国の主人公に変えていく思想としてのリアリズムにねざす演劇こそが、観客に正しく作用し定着しうる。この点をあいまいにしての交流や組織から、斗いはおこせない。

ロ、自分の地域、観客に責任をもち活動の中で一定の成果をあげていく劇団が、いま東日本の一県に一集団宛必要だ。ないところにはつくり、弱いところは援助し

て実現したい。近い将来、西リ演との合同によつて、全国に強力な劇団の網を張りめぐらそう。

ハ、東リ演の加盟集団は、地域の演劇—文化状況を生みだす母胎である。地域の文化的共斗、文化の統一戦線をそこが中心になつて組んでいく。

ニ、東京について、その特殊性をみとめ、あせらずにしかし原則をつらぬいて行く。新劇人会議をふくめて既存の組織・劇団を分裂させる方向はとらない。共通する大目標のための行動の統一と、それに基づく創造普及活動への相互援助を原則とする。東京芸術座に参加を求め準備会の真意は、村山知義氏論文に示された内容を、劇団が主体的に生かしてほしいという希望のあらわれである。

付記すると、総会一週間前に静岡で行なわれた「第二回演劇合同ゼミナール」は、十一団体七十二名が参加、活発な問題提起と討論を二日にわたつて展開したのですが、各集団とも、この中で東リ演結成の必要性を具体的につかんだといえます。



結成のことは

一九六三年八月

八月二四、二五日、東京に集つたわれわれは、全体の意志で東日本リアリズム演劇会議を結成しました。われわれは現実にはち向つて真実と美を追求する演劇芸術家として、いま祖国を掩つているきびしい状況から目をそらすことができません。アメリカと日本の反動的な結託が強行している投機は、ますます露骨で

危険なものになり、このままでは、十八年前肝に銘じた、再び戦争の被害者にもまして加害者にも断じてなるまいとしたわれわれの誓いは、なしくずしにむしばまれ反故にされかねません。

われわれは今日までそれぞれの場で、平和と民主主義そして国の独立を求める国民の斗いと結びつきながら、演劇創造と普及の活動をすすめてきました。働らく観客にうけとめられささえられることによつて、これらの仕事はわれわれを勇気づけたばかりでなく、全く新しい演劇状況をつくりだすことにもなりました。更に気付いてみると、この状況が日本の各地点で、観客との共斗の中から誕生しているかぞえきれぬ真実があつたのです。

われわれは分散してつくられてきたこの新しい状況を演劇運動全体のものにしたいと思つたのです。

東り演規約

第一条

当会議は「東日本リアリズム演劇会議」と称し結成の趣旨にもとづく活動をおこなうことを目的とします。

第二条

当会議は東日本（中部、北陸、関東、東北、北海道）に所在して演劇活動をおこない、原則としてその活動によつて一定の成果をあげている演劇集団によつて組織します。

第三条

当会議はその目的を達成するため、各演劇集団の主体的条件を尊重しつつ、研究集会、観劇交流、機関紙等の発行、その他必要な事業をおこなひ、創造の高揚と普及に関する協力をしあひ

結成のことば・規約

状況のきびしさをかこつて守勢をとるのでなく、すぐれた創造とうずまぐ普及のしごとを先手をとつてうちたてていく―われわれの演劇文化状況を主体的に展開していくためには観客に責任を負う集団が緊密に連結し、力柄をつよめていく必要が、しかも急速にあります。

西日本リアリズム演劇会議が、まさに同じ時点で同じ必要から西日本十七集団を結集し、一年間に着実な成果をあげつつあることもわれわれの確信を強めてくれました。

われわれは共通の目標を明らかにし、創造普及の土台になる演劇リアリズムの思想と方法を探求し、国民にとつて必要有効なすべく豊かな舞台芸術を生みだす保証が、この結集にあると思います。

互いに交流しあい、学びあい、経験を理論に高め、さらに実践でたしかめあう真の連帯の中から、現在点

を拠点とし、拠点文化の共闘がくまれ、それを基礎とした全国的な運動の視野もひらけてきます。

われわれの観客の演劇への要求は質量ともに最高最大のものであり、しかも日と共に進んでいます。この要求にこたえる事が演劇芸術家の任務であるとともに生甲斐そのものだといえます。

東日本リアリズム演劇会議は、それぞれの地点で観客に責任を負つて民族的民主的な演劇の創造と普及のために、ねばり強い仕事を進めている仲間の集団が、この中に加わつて会議を太らせ力をつよめてくれる事を心から期待します。

われわれはこの結集をおして、日本の演劇の未来像をいきいきとしたビジョンとしてつかみ、歴史と国民から付託された重要な任務を果たします。

一九六三年八月二十五日

東日本リアリズム演劇会議

ます。

第四条 当会議は代表者会議および運営委員会によつて構成されます。代表者会議は年一回以上、運営委員会は必要に応じて開催します。

第五条 代表者会議は、議長、副議長、運営委員、事務局長を選びます。

第六条 運営委員会は、当会議の運営に責任をもちます。その選出は代表者会議の互選により任期を一年とします。但し再選はさまざまありません。

第七条 当会議の会計は会費及び事業収入その他でまかさない。

第八条 当会議への加盟、脱退は運営委員会で、除名は代表者会議で決定します。

第九条 本規約の改正は代表者会議で決定します。

第十条 本規約は、一九六三年八月二十五日より有効となります。

第一年度東り演運動方針

1. 結成総会での準備会報告、野村喬氏の講演、各劇団報告、及びこれをめぐつての討論は、いま私たちの演劇運動が当面している主要な問題点をくつきり反映させたのですが、その集約は私たちが固く団結する—その結果体を緊急必要としている、という一点にあるといえます。すべての報告が、東り演への高い関心を示し、基本的な賛意をあらわし、ただちに参加し得ない条件の集団もやがて必ず参加する前提で、全議事に積極的な姿勢をとつてくれたことから、この組織の目標が共通のものであるのを知ることができます。



私たちは国民に責任を負う演劇活動の経験から、団結の困難さをその不可欠な必要性に優位させる発想を排し、最高の道徳—団結のためにこの会議に結集したのです。

2. 結集の基底になる統一的な理念は、私たちの演劇創造と普及の活動を、誰の何のためにもどうおこなうのか、を実践の中で明らかにするかまゝから生まれています。

野村氏講演中の、立場・観点・方法の問題です。

準備会報告は、現在の演劇状況を、日本が平和でないばかりでなく、アメリカにれい属して独立しておらず、日本支配階級が利潤の分け前にあずかる立場から、国の

すべての政策の安保体制化を強行し、原子力潜水艦寄港問題に露骨にあらわれているように、日本の反共軍事基地化、核武装化をいそいでいる現実との政治的関連の中でとらえる必要を強調しています。

民族の独立と平和が歴史始つて以来の危機にさらされている今、わが国は、支配権力の政治、経済、思想、文化全域の反動攻撃にも抱らず、現状をきりひらき、解放の明日をよぶためにねばり強く闘っています。

私たちは新しい日本の演劇運動がその創始から連続と保つてきた、現状変革の思想と歴史を発展的にうけてつぐ意味で、闘う国民の立場・観点を自身のそれとして受けとめます。

3. 私たちの演劇会議が、リアリズムを呼称するのは、運動の主軸を創造の問題にすえるからに他なりません。米日反動の支配思想の攻撃に対して、受身の抵抗ではなく、せめ手の論理—方法としての演劇リアリズムは、流派や様式でなく現状変革の思想としてとらえられる必要があり、創造の根源的なエネルギーを歴史的社会的現実の切りこんで求めるところから、あたらしい演劇状況を展開する方法論が生みだされねばなりません。

私たちは東リ演に結集する地点で、一切のアマチュアリズムを否定し、職業非職業の別なく演劇創造の専門者

であることを自身に課し、集団の創造力を高める観点から、学習、訓練を積み、普及活動による観客の批判に学び、いきいきと充実した劇団生活によつてすぐれたアンサンブルをつくり出す必要があります。

舞台創造の基本は、超課題が舞台の行動としてはつきりとらえられ、現状変革のドラマの思想が、演劇労働者私たちの自己変革として具体的につかまれるところから始まり、技術の源泉をここに求めるのでないと、枝葉の繁りが幹を見失わせる結果になります。

観客の舞台に対する本質的な要求が、いかに大きく高いかを知る私たちは、創造に対する主体的、独創的などりくみが、集団にもメンバーにも、まさにきびしい喜びをもたらすその極点をめざして自分を変えなまを変えぬ闘いをおこしていかねばならないのだと思います。

4. 新しい演劇が国民の闘いを反映し、その中で支えられ鍛えられ、芸術としての生命を燃焼するものである以上、普及の観点が創造のそれに比して軽視されることはありません。普及こそが創造の向上を保証するといえます。観客が演劇をつくるという原則は、国民の生活と闘いに密着し、そのエネルギーをくみあげる私たちの実践によつてつらぬかれます。

米日反動が国民の闘いをおしつぶすための武器である現

扶肯定—人間疎外—挫折孤立の思想に毒されるのは、私たちが観客—国民との共闘をくめず、そこに間隙をつくっているからです。

岩手ぶどう座が全村一戸あたり一人の観客を動員して、いるという事実の重みから、新しい演劇—文化状況をつくる発想は生れてこなければならぬでしょう。ひとにぎりの演劇愛好者と新聞批評に正対して、演劇の衰弱をかこつているのは客観的にはこついでしかありません。国民は私たちの演劇を渴望しており、私たちの普及活動は極めて僅かしかそれに応えていない—これが私たちの打破すべき壁です。

5. 最低、県ごとに核となつて、リアリズム演劇の創造と普及に努め、観客—国民とのかたい結合を根に地域の文化状況に作用し、労組、民主文化組織との連帯の中で地域を拠点に高め、拠点文化の民族性、具体性によつて全般的、画一的な支配思想—文化を反撃敗退させていくその母胎としての演劇集団がなければなりません。

東リ演の組織目標は第一に私たちの集団をすぐれた核にし、更に核となる集団の誕生と成長を援けることであり、第二に集団の点と点を線でつなぎ、線を面に拡大していくことであるといえます。

職業劇団からサークルにいたる巾ひろい集団が、東リ

演をよりどころとして、閉塞の状況をきりひろくためには、幾つかの矛盾を解いていく必要があります。これもぶどう座から提起された、観客が農民であり子供から老人までを含めている現状で、東リ演の目標をどう具体的にとらえたらいいのかという問題もその一例です、根底にリアリズムを捉えるなら、民話劇であれ、子供の芝居であれ、対象に応じた多様な創造スタイルがあるのだからという答え方ですませてしまえない具体的な問題を、一諸に考え合つていくのでないと、ぶどう座にとつて東リ演は有効な組織にならないだろうと思います。実践に裏づけられた交流—相互批判の中で、共通の立場、観点、方法をまさぐり、一つ一つ矛盾をといっていくところに、東リ演結成の主要な意義があるのです。会議は私たちの手かせ足かせではなく、高い飛翔のための翼になるべきです。

現状は、一集団の成果が私たち全体のプラスになり、マイナスが共通の痛みとして捉えられる緊密な連帯を要求しています。創造にまでくいこむ助言や評価が、こわすおそれのあるひよわな相互関係では、国民の要望にこたえる組織たり得ません。東リ演は、日本演劇を発展させるための、同志的愛情に支えられた結集体であります。

加盟劇団連名

北海道ブロック

劇団 新劇場 札幌市豊平四条十三丁目 市営ア

パート一の九 松波番介方

劇団 さつぼろ 札幌市月寒東一の八 月寒運動広

場内 〇一二二(八六) 七六八七

東北ブロック

弘前演劇研究会 青森県弘前市品川町一 ブラジル

内 〇一七二二(二) 四七五七

仙台小劇場 仙台市 取字大谷地三の三 早川

寿方

劇団 やまなみ

甲府市青沼一丁目八番十号 梅津
幸二方 〇五五二(三) 九五五六

群馬中央芸術劇場

前橋市本町二丁目 十九の八
〇二七二(二) 五八〇三

労働芸術劇場

東京都品川区南大井一〇十四の十
六 〇三(七六四) 六二〇五

演劇集団土の会

東京都港区西麻布四の五の九
矢野方

舞芸小劇場

東京都豊島区西池袋三の五の十五
〇三(九七一) 二八一九

青年劇場

東京都練馬区下石神井一の四九二
〇三(九九七) 五九六七

劇団協同

東京都立川市曙町三の四八の七
〇四二五(七三) 〇五一八

関東ブロック

劇団むぎの会 新潟市

加盟劇団連盟

名連団劇加盟

よこはま青年座 横浜市中区庵ノ上一二九 宇都宮

方 〇四五(六八一) 九六一五

京浜協同劇団 川崎市上平間一二七五 〇四四

(五二) 八八一五

上野市民劇場 三重県上野市丸の内 中央公民館

内 〇五九五二(二) 四二二一

後藤方

東海ブロック

劇団つくしの会 静岡県富士宮市西町二〇の二 野

沢方

静岡芸術劇場 静岡市昭府町二八九の二 演劇、

音楽センター内 〇五四二(七二)

七三三七

劇団からつかぜ 浜松市板屋町三一五 伊藤アパ

ト内

東リ演事務局

静岡市昭府町二八九の二 演劇音楽センター内

〇五四二一七七一七三三七

西リ演事務局

大阪市阿部野区文の里四の一 関西芸術座内

中部ブロック

名古屋演劇集団 名古屋市中区西新町二の八 大東

ビル内 〇五二(二四二) 五六五二

演研でくのぼりの会 名古屋市南区大磯通り三の十二 栗

木方 〇五二(八二二) 四〇四三

劇団はぐるま 岐阜市西野町一 〇五八二(六五)

一八五二

劇団すがお 三重県桑名市大福二二九の一



あ

と

が

き

第六回総会の要請で、東リ演決議、決定集を発行する準備に入りましたが、すでに五年以上の歴史をもつ東リ演は、文献も予想以上に多く相当の準備期間を必要とすることがわかりました。

又、綱領をもつための準備も、第七回総会をめざして進められようとしており、そのため、全決議、決定を収録し発行する作業は来年度に行うことになりました。

しかし、東リ演加盟を希望する劇団が十余あまりある中で、東リ演の規約、性格、めざす方向など、東リ演を理解したいという要求はますます多くなっているにもかかわらず、創立時の文献などはすでに手に入れることは困難です。

そのため、このような加盟のための資料としてとりあえず発行するものです。加盟のための資料としても、又、東リ演を理解する上でも要求にこたえる内容には程遠いものですが、東リ演加盟の劇団、自主的・民主的劇団のみならず、東リ演を^{理解}し、周辺に^{拡げ}て^せて東リ演の環を一段と^{拡大}・^{強化}する活動の一助となれば幸いです。

(事務局)

東リ演加盟のための資料

発行 1968年12月15日

編集・発行所 東日本リアリズム演劇会議

静岡市昭府町289の2

電話 0542(71)7337

頒 価 40 円